

## 接頭辞の詩学と哲学：раз- と со-

伊 東 一 郎

## 1. 「分一立」としての「距離」

詩人マリーナ・ツヴェターエワ（1892-1941）は1925年の3月にボリス・パステルナーク（1890-1960）にあててプラハから次のような無題の書簡詩を書いた（イタリックは引用者——以下の訳詞についても同様）。

Б. Пастернаку

*Рас*-стояние: версты, мили...Нас *рас*-ставили, *рас*-садили,

Чтобы тихо себя вели,

По двум *раз*ным концам земли.*Рас*-стояние: версты, дали...Нас *рас*клеили, *рас*паяли,В две руки *раз*вели, *рас*пяв,

И не знали, что это — сплав

Вдохновений и сухожилий...

Не *рас*сóрили — *рас*сорíли,*Рас*слоили...

Стена да ров.

*Рас*селили нас, как орлов—

Заговорщиков: версты, дали...

Не *рас*строили — *ра*стеряли.

По трушобам земных широт

*Рас*совали нас, как сирот.

Который уж — ну который —март?!

Разбили нас — как колоду карт!

24 марта 1925

次に筆者の試訳を掲げる。

B. パステルナークへ

分かれて一立つ：幾露里も幾哩もの距離 .....

この地上の果てと果てとに分かれて

ひっそりと暮らすようにと

私たちは分け一隔てられ、分け一植えられた

分かれて一立つ：幾露里も遠く隔たてられた距離 .....

私たちは引き剥がされ、引き離された、

十字架の上の両手のように押し広げられ、釘打たれて、

初めて知ったのだ —— 私たちが

靈感と筋とが一つに溶け合ったものだったということを .....

仲違いしたのではなく —— ばらばらに捨てられたのだ、

結晶のように薄片に引き裂かれて .....

壁と壕とに

私たちの住いは引き離された、陰謀をかたらった

二羽の鷺のように：幾露里も遙か遠く隔てられて .....

けんか別れをしたのではなく —— 互いに失ったのだ

この広い地上の僻遠の地の果てと果てとに

寄るべない兄と妹のように押し分けられて

もう何度目の —— いったい何度目の —— 三月？！

私たちは二つに割られてしまったのだ——一組のトランプのように！

ツヴェターエフは1922年にソ連を去り、プラハとパリで暮らしたのち1938年に帰国するが、詩人としての活動の道は閉され、41年に自殺する。パステルナークとは彼の詩集『わが妹人生』（1922）に熱烈な讃辞を送ってから文通が続いていた。この詩には克服しがたく二人を分け隔てる「距離」への痛切な思いが吐露されている。

ところでこの詩をロシア語で一読して強い印象を受けるのは、詩の冒頭に置かれた *расстояние* 「距離」という単語が *рас-стояние* とハイフンによって分綴されていることである。この分綴によって「別れて一立つこと」という語源的な意味がそこに裸形化し、視覚的にもハイフンで引き裂かれた接頭辞と動名詞とがあたかも国外と国内とに引き裂かれたツヴェターエフとパステルナークを象徴しているかのように見えるからである。そしてそれに誘発されるかのように、*рас-*ставить「間を広げる」、*рас-*садить「株分けする」、*рас-*клеить「引き剥がす」、*рас-*паять「はんだ付けをはがす」、*раз-*вести「押し分ける」、*рас-*пять「十字架にかける」、*рас-*сорить「仲たがいさせる」、*рас-*сорить「(方々に) こぼす」、*рас-*слоить「薄くはがす」、*рас-*селить「別居させる」、*рас-*строить「仲たがいさせる」、*рас-*терять「(つぎつぎに) 失う」、*рас-*совать「(方々へ) 押し込む」、*раз-*бить「打ち砕く、分ける」と、同一接頭辞 *раз-* (*рас-*) を持つ動詞が14も繰り返されていることである。

「疎隔」、「分離」などを意味する接頭辞 *раз-* が強迫的に反復されることによって、故郷ロシアを離れたツヴェターエフの悲劇、その孤独感、孤絶感が圧倒的な迫力で表現されている。ここでは詩のモチーフは単語ですらなく、接頭辞にまで解体されているのだ。

意味と音のたたみかけるような反復をもたらすこのような手法は、形態素反復という詩的言語の一般的手法の一つのあらわれであり、ツヴェターエフはこの手法を好んで用いた。それはパステルナークやマンデリシュタムらの同時代の詩人には見出すことができない。

ロマン・ヤコブソン（1896–1982）はこの詩に触れて次のように書いている。

「マリーナ・ツヴェターエフが1925年3月に B. L. パステルナークに送った書簡詩は、呪術師の呪文のようにくっきりと浮き立たせられた接頭辞——それは叙情的モノローグの主題にまでなっている——の鮮やかな例を提供してくれる。このテーマを詩人は多義的な意味論的ヴァリエーションによって豊かにし、特に詩の冒頭で動詞 *рас-*ставить「間を広げる」と動名詞 *рас-стояние* 「距離、隔たり」との語源的な関連をよみがえらせている。この *рас-стояние* という名詞が第一行と第五行の冒頭に置かれ、その際に第一連から第二連にかけて作者によって接尾辞と語根の間に四度挿入されたハイフンがこの接尾辞の自律した意義を暗示している。そしてこの接尾辞 *раз-* は、同根の派生形容詞 *разные* 「異なる」との接近によってさらに前景化されている」

「興味深いのは、後にツヴェターエフがこの詩についての覚え書きの中で語っている、最終行での『イメージの不一致の悲しい意識<sup>(1)</sup>』、即ち濫喩の感覚である。この濫喩をそれにもかかわら

ず『表現する』ことを彼女は放棄しなかった。つまりここで *разбили* という動詞は、同時に二つのコンテキストにかかわる異なる意味を保持している——各々を『打ち砕いた』という意味と一体性を『引き裂いた』という意味である。全く同一の接尾辞を持つ16の単語が分綴されたり対比されることによって生みだされる見事な効果が作者の悲劇的状况を浮き彫りにし、全一性の解体と相互関連の喪失を宣告するこの接頭辞の一般的意味を明らかにして、それを鋭く我々に突きつけているのである」[Jakobson 1985: 91-92] (同様の指摘はチェルカーソワも行っている [Черкасова 1975: 146-147])。

そもそも「距離」というロシア語が、「分かれて (*рас-*)」「立つこと (*стояние*)」と分析されることへの痛ましい反省からおそらく生まれたこの詩だが、*расстояние* という語の語源についてはふたとおりの説がある。第一は教会スラヴ語の *расстояти* から派生された動名詞とするものである。現代ロシア語に *расстоять* という動詞は継承されなかったが、方言に残されているという [Шанский и др. 1971: 384]。もうひとつの説によれば18世紀にカラムジンとそのグループによって造語されたもので、ラテン語の *dis-stāre* 「離れて立つ」に由来するフランス語の *distance* の借用語であるという [Unbegaun 1969: 47]。

このどちらが正しいかは決定できないが、18世紀のロシア語に *рас-стоять* という動詞はなく、*рас-стояние* という語に当時の作家・詩人たちがフランス語の *distance* を連想していたことは大いにありそうなことである。

ところで「距離」という言葉を *distance* というフランス語に重ねあわせてみると、どうしても思い出されるのが、吉田一穂 (1898-1973) のあまりに有名な詩「母」である。

あ、麗<sup>デスタンス</sup>はしい距離  
つねに遠のいてゆく風景……

悲しみの彼方、母への  
捜<sup>ビアニッシモ</sup>り打つ夜半の最弱音

ツヴェターエワの詩の4年前、1921年に書かれたこの詩は、古典主義的な構築性を感じさせる名作だが、この詩における「距離」は、空間的な疎隔というよりは、むしろ「追憶」のメタフォアとしての時間的な距離であり、ツヴェターエワがその詩に表現したような、革命によって引き裂かれた空間的な「距離」はここにはもちろん感じられない。しかしそれでもなお、ここで吉田一穂が「距離」という漢語にあえてふった「デスタンス」というルビの背後には「別れて一立つ」というこのフランス語の原義が透けて見えてくるのである。

ところでこのツヴェターエワの詩のようにその言語に形態論的手段を駆使した詩作品を他言語

に訳すのは至難の技である。ここに掲げた私の訳も全くの試訳であって、接頭辞 раз- の反復を日本語の文法的手段で表現することは不可能であった。それが可能であるとすれば同様の言語構造を持つ他のスラヴ語のみであろう。

そのような例として現代セルビアの小説家・詩人ダニーロ・キシユ（1935-1989）<sup>(2)</sup> のセルビア語訳を次に掲げる。

*Раз-стојање: врсте, миље...*

Нас су *раз-*ставили, *раз-*садили,

Да бисмо били тихи ко два сирочета,

На два *разна* краја света.

*Раз-стојање: врсте, даљина сура...*

Нас су *разлепили*, *разлемили*,

И нису знали да је то — легура

Надахнућа: жиле и тетиве...

Нису нас завадили — већ *разбили*, живе

*Раслојили...*

Уз зидове и ровове.

*Раселили* су нас, ко орлове —

Заверенике: врсте, даљине...

Нису нас *растројили* — само су нас смутили.

По честарима земљине ширине

Нас су, као сирочиће, *раз-*путили.

Који је већ — који — зар крај марта?!

*Разбили* су нас — као шпил карта!

[ Киш 1992: 244 ]

このキシユの訳詩で注目されるのは、この詩のキー・ワードである「距離」を意味するロシア

語 *раз-стояние* を訳すために、キシュがセルビア語の正書法から意識的に逸脱し、その訳語に *раз-стојање* という変則的な語形をあてていることである。本来のセルビア語の正書法では、この語は *растојање* と綴られ、接頭尾末尾の子音 *з* が訳詞に用いられた動詞 *растројили*, *раселили* のように語根冒頭の子音 *с* と融合しているのだが、しかしこの綴りでは、ツヴェターエワの執拗な接頭辞 *раз-* の反復を翻訳できない。おそらくこのためにキシュはこれをあえて *раз-стояње* と、接頭辞 *раз-* をよみがえらせる語形で訳したのである。ここでキシュはツヴェターエワを翻訳することによってセルビア語 *растојање* の語源的な意味をいわば再発見しているのだ。

冒頭の *раз-стојање* のあとも、第一連で *раз-ставили* 「間を広げる」、*раз-садити* 「株分けする」、と分綴されて表記されている動詞は、標準的なセルビア語の正書法ならば同様の子音融合の結果それぞれ *раставили*, *расадити* と綴られるべきものである。キシュはこのセルビア語の訳詩の中で、可能な限りツヴェターエワの接頭辞反復を移しかえようとしているのである。

キシュの訳詩集の編著ブレドラグ・チュディチは、キシュのロシア詩の翻訳の中でツヴェターエワの訳詩をもっとも高く評価し、彼はツヴェターエワの言語実験をセルビア語に移すという困難な課題を見事に解決し、あたかもセルビア語でツヴェターエワが書いたかのような出来ばえである、と絶賛している [Киш 1992: 362]。しかしそのことを可能にしたのは、ロシア語とセルビア語の言語的な近さである。キシュのこの訳詩は彼の死後の1990年に出版されており、おそらく彼の最晩年に亡命先のパリで書かれたものと思われる。ツヴェターエワがこの詩で表現している望郷の思いはキシュにも共通のものであったろう。

ダニーロ・キシュはツヴェターエワの接頭辞反復の手法を見事にセルビア語に移してみせたが、これをスラヴ語以外の言語に移しかえることには当然困難が予想される。しかし独立性の強い前綴りを多用するドイツ語への訳詩には、この文法的手法を意識したものが見出せる。次のエルケ・エルプによる訳もその一つである。

*Ab-stand, weit-ab: Werste, Meilen...*  
*Ab-getrennt, aus-gesetzt, zwei zu teilen:*  
 Daß jeder stille hält  
 An seinem Ende der Welt.

*Ab-stand, Ab-seits: Werste, Weiten...*  
*Abgelötet, -geleimt, in entzweite*  
 Zwei Hände — am Kruez — *abgezweigt*,  
 Als wüßten sie nicht, wie das zeugt,

Den Sehnen Begeisterung schenkt...

Abtrünnig nicht — *abgedrängt*,

*Abgegrenzt*...

Mauer und Graben.

Auseinandergesprengt wie die Adler -

Verschwörer: Werste und Weiten...

*Abgezwängte*, verlorene Seiten.

In die Asyle erdbreitenweit

Haben sie uns, wie Waisen, verstreut.

Am wievielten März — na, an welchem, wie?

Einem Kartenspiel gleich — uns aus warfen sie.

[ Zwetaewa 1990: 69 ]

この訳ではロシア語の рас-стояние は、それと正確に対応する語構成を持つドイツ語 Ab-stand 「分一立＝距離」によって分綴を施されて訳されている。また一連と二連でも前綴りの ab- が分綴されて反復され、この詩の文法的構造をなぞっている。

この詩のクリスタ・ライニヒによるもう一つのドイツ語訳は次のようなものである。

*Entfernung*: Kilometer, Meilen

wir sind *entfernt*, *entsetzt*, *entstellt*,

daß wir zur Ruhe kommen sollen

an den beiden Polen dieser Welt.

*Entfernung*: Kilometer, Meilen

wir sind *entklebt*, *entlötet*

in zwei Kreuzesarmen

und wußten nicht, daß dies die Mischung ist

erleuchtet und gespannt zu sein...

*Entfremdet*, nicht *entfremdet*

*enthoben*...

Wand und Graben  
*entrissen* wie Kriegsadler —

Verschwörer: Kilometer, Meilen  
*entknotet*, nicht *entronnen*  
 in die Kabuffs *entlegner* Winkel  
 hineingestopft wie Waisenkinder.

An welchem war's, an welchem März  
 hat man uns wie ein Kartenspiel verteilt.  
 [ Etkind 1981: 347-348 ]

ここで *рас-стояние* の訳にあてられているのは Entfernung である。前綴り *ent-* も、ロシア語の接頭辞 *раз-* に対応する意味を持っているが、*fern-* は、「遠隔」を意味する語根で、そこに *Ab-* *stand* の *Stand* のように「立つこと」という動名詞的意味はない。この訳詞ではエルプのもののようにツヴェターエワの分綴を保持してはいないが、前綴り *ent-* は最後まで執拗に反復されている。ツヴェターエワの「接頭辞の詩学」がここでも貫徹しているのである。

## 2. 「共同知」としての「良心」

語源的な意味へと遡ることによって、日常的には我々の目から覆い隠されていた意味を浮上させる、という方法は、詩的言語のみならず哲学的思考にも特徴的なものである。ツヴェターエワに先だつ世代のロシアの宗教哲学者セルゲイ・ブルガーコフ (1871-1944) の『日暮れざる光』(1917) には次のような一節がある。

「人間の自然なエゴイズムからかくも不思議に自由な自己の良心 (совесть) において、人はある人が彼と共に彼の行いを「共に一知っている」(со-вѣсть) こと、ある人が彼に対してその裁きを行い、いつも彼を見ていることを感じるのである」[Булгаков 1994: 45]

ここでブルガーコフがこだわっているのは、ロシア語の「良心」を意味する *совесть* が、「共に一知る事」(со-вѣсть) という語源的意味を内包していることである。

ロシア語の *совесть* は、新約ギリシャ語 *syn-eidēsīs* の借用訳である教会スラヴ語 *съ-вѣсть* に由来する。そしてこの語構成は、ラテン語の *con-scientia*, フランス語・英語の *con-science*, ドイツ語の *Ge-wissen* と共通のものである。これらの語はいずれも接頭辞あるいは前綴りによって「共



同知」を意味する。「良心」とはブルガーコフの説くように、自分だけでなく、共に誰かが自分の行いを知っている」という意識なのである。この教会スラヴ語は「良心」の意味でウクライナ語の совість、ブルガリア語の съвест、セルビア＝クロアチア語の savjest などに受け継がれているが、西スラヴ語にはこの語形は見出されない。チェコ語の svědomí は、同様に接頭辞 s- と、「知る」を意味する動名詞 vědomí から構成され、やはり「良心」を意味するが、こちらはラテン語 con-scientia から借用されたものと考えられている [Черных 1993: 184]。

### 3. 「共同知」としての「意識」

ところで欧米諸語では、「良心」を意味する語は、しばしば同時に「意識一般」を意味する語としても用いられた。前述のギリシャ語の syn-eidēsis も、ラテン語の con-scientia もそうである。フランス語では con-science がこの両義性を保ち、英語では conscience を「良心」にあて、派生語の consciousness を「意識」にあてている。そして実は教会スラヴ語でも съвѣсть は、ギリシャ語の両義性を継承し、「良心」と「意識」を共に意味していた。ところがロシア語においては совесть から「意識」の意味は失われ、「意識」を意味するロシア語としては新たに со-знание という語が生まれたのである。ロシア語ではこうして共に接頭辞 со- と、「知る」を意味する動詞語根 ве (вѣ-), зна- によって構成され「共同知」を意味しながら、「良心」を意味する совесть と「意識」を意味する сознание が語彙として分離することになった。ジャンケレヴィッチも次のように注意を促している。

「ロシア語は、『共同知』であるところの『意識』 сознание と『良心』 совесть とを、一語による可能な多義表現を用いることなく区別している」 [Jankélévitch 1966: 42]。

ロシア語の совесть「良心」が教会スラヴ語に由来するのに対して、сознание「意識」は教会スラヴ語には存在しない語形であり、明らかに新しく造語されたものである。教会スラヴ語の съвѣсть は「良心」と「意識」を同時に意味する語であったため、そもそも сознание という別の語は必要なかったのである。

сознание という語がいつ頃ロシア語に登場したかについては、二つの説がある。第一はラテン語の con-scientia の借用訳であるというもの [Шанский и др. 1971: 420]。その場合この語はおそらく17-18世紀にバロック期のウクライナを介し、スコラ哲学のコンテクストにおいて輸入されたものだったろう。第二は19世紀前半にドイツ語 Ge-wissen の借用訳としてドイツ哲学の影響下に輸入されたというものである [Unbegaun 1969: 48]。後者の訳はドイツ語の Gewissen が「良心」の意味しか持たないことで若干説得力を欠く。

18世紀から19世紀にかけて作られたロシア語辞書を見てみると、1736-38年に作られたゴンザの『新スラヴ・日本語辞典』には、сознание の語はなく、совесть には「ココロ (心)」という微妙な日本語訳がつけられている [ゴンザ 1985: 333]。1822年のアカデミー版ロシア語辞典では

сознание の項目はあるが、「ある真実を認め共感すること」という説明がなされていて、中性的な哲学的概念である「意識」というニュアンスはそこにはない。

いずれにしてもロシア語は со-знание という語を新たに造り出すことによって「共同知」という語源的意味を保持させながら、倫理的意味を離れた中性的な哲学的概念を新たに獲得したのだった。そしてロシア語においてその後 сознание という言葉の「共同知」という意味は忘れられていくのだが、この語源的な意味をおそらく誰よりも強く意識していたのがミハイル・バフチン (1895-1975) であった。元来バフチンは接頭辞 со- に重い意味論的負荷をかけて様々な術語を再解釈する傾向があるが、初期の論稿においてバフチンは既にロシア語の сознание における接頭辞 со- に大きな意味を読み込んでいた。

クラークとホルクイストは初期バフチンの思考をパラフレーズして次のように述べている。

「意識の中には孤立した行為は一つとしてない。あらゆる思考は他の思考と結びついており、その上他者の思考と結びついている。従って世界は存在 (бытие) をもつが、意識はつねに共意識である (自覚という面に力点のある意識を表わす普通のロシア語は сознание [共・知] である)。存在はそれゆえ「共にあること」である。これを表わすロシア語の событие бытия の場合、はじめの言葉 событие (出来事) は「共にあること」(со-бытие) と分解できるので、この二語は「存在の共存在」とも訳しうるのである。この同時性と共有性の強調はバフチンの全著作を特徴づけている」[Clark and Holquist 1984: 77; クラーク、ホルクイスト 1990: 107]

#### 4. 「共同存在」としての「出来事」

「存在」を「共同存在」と捉えるバフチンの思想は、クラークとホルクイストの指摘するように、「存在」 бытие を「出来事」 событие たる「共・存在」со-бытие に重ねあわせる発想にあらわれている。событие 「出来事」の中に со-бытие 「共同存在」の意味を読み込むことはロシア人の語感としては自然なのかもしれない。19世紀の民衆語を集成したウラジーミル・ダーリのロシア語辞典の событие の項目には、実はまず「共に、同時にあること」という語義が示され、「出来事」という語義は二義的なものとなっている。バフチンがこの語の両義性の中に「存在は共同存在であり、それはモノではなく出来事、なのだ」というイデーを読みとったことは想像に難くない。バフチンはそのドストエフスキー論の初版『ドストエフスキーの創作の諸問題』(1929) でドストエフスキーにおける対話とプラトンにおけるそれとの違いを次のように規定していた。

「この点でドストエフスキーの対話とプラトンの対話は異なっている。後者においては、たとえそれが全面的にモノローグ化された教育的な対話ではないにしても、やはり声の複数性というものはイデーの中でかき消されてしまっている。プラトンにおいてイデーは出来事＝共同存在 (событие) としてではなく、ただ存在 (бытие) としてのみ考えられているにすぎない」[Бахтин

1994: 177]

## 5. hfpyj-htxbt' hetro-glossia

バフチンが接頭辞 со- にこだわり、この接頭辞を冠する多くの術語をその著作のキー・ワードとしてきたことは、一見前世代のロシアの宗教哲学者が志向した「個と全体を統合した全一性の回復」というモチーフを継承したもののように見える<sup>(3)</sup>。

このモチーフを象徴する術語にやはり接頭辞 со- を持つ名詞ソボルノスチ соборность がある。この語は「集い」「教会」を意味する名詞ソボル со-бор の形容詞形 со-борный から派生した抽象名詞であるが、ホミャコフによって「自由と統一」とを矛盾なく実現するロシア正教的共同性と規定された。この理念は後に多くの哲学者に受け継がれたが、S. トルベツコイの提唱した「意識（сознание）のソボル（собор）的本質」というスローガンには、再び接頭辞 со- の反復が見出される。

しかしバフチンのオリジナリティーは、接頭辞 со- で含意されるものが、予定調和的な共同性というよりは、要素を対比・衝突させる同時性として捉えられている点にある。バフチンが「対話」における「他者性」の重要性を強調するゆえんである。

「共同存在」со-бытие が「出来事」となるためにはためには、そこで対比される二つの要素が同一システム内の等質な存在であっては不可能であり、そこには根源的な「他者性」「差異」といったものが逆に要請される。バフチンが「対話（ディアローグ）」という語を用いる時に念頭に置いているのは、このようないわば生産的な「差異」なのである。この「差異」を示す接頭辞としてバフチンが多用するのが動詞接頭辞 раз- や、形容詞 разный 「異なる」から派生した名詞接頭辞 разно- である。

後者の разно- を用いた語をバフチンが再解釈しているよい例に、「小説の言葉」（1935）のキー・ワードのひとつである「ラズノレーチエ」разно-речие という語である。この語はそもそも「(相互に) 異なる様々なことば、ことばづかい」ほどの意味に分解できる単語だが、辞書的に登録されているのは「①（見解の）不一致、②（言葉の）矛盾、③（演奏の）不調和」といった意味である。しかしバフチンはこの語を разно-язычие 「異言語性」、противо-речие 「矛盾」（おそらくドイツ語 Wider-spruch の借用訳）などの一連の術語の系列の中で用いており、上記のような辞書的な意味では用いていない。「小説の言葉」ではこの語は相互にぶつかりあいながら相関している様々な下位言語（職業語、世代に特有のことば、方言等々）の総体の意味で用いられている。

バフチンが「ラズノレーチエ」という語をどのように用いているかを具体的に見てみよう。

「単一言語とは与えられるものではなく、本質的に課せられるものであり、言語生活のあらゆる

瞬間において現実のラズノレーチエ [= 言語的多様性 — 伊東] に対立するものなのである」[Бахтин 1975: 83-84; バフチン 1996: 27]。

「あらゆる言表は〈単一言語〉(求心的諸力と諸傾向)に参加すると同時に、社会的・歴史的なラズノレーチエ(遠心的な、分化を志向する力)にも関与している」[Бахтин 1975: 85; バフチン 1996: 30]。

「……これら下層のジャンルにおいて組織された(そのジャンルのあらゆるヴァリエーションを含む)ラズノレーチエは、公認された標準語——国民や時代の言語・イデオロギーの生の言語的中心——に対するラズノレーチエ [= 矛盾 — 伊東] であったばかりでなく、それに対する意識的な対立でもあった。それは同時代の公式的諸言語に対してパロディー的かつ論争的に鋭く対置された。それは対話化されたラズノレーチエだったのである」[Бахтин 1975: 86; バフチン 1996: 31]。

「ラズノレーチエ」разно-речие というこの術語はトドロフによって hetero-logie と訳され、エマーソン、クラーク、ホルクイストらの英訳では hetero-glossia と訳された。英訳を通じて後者の訳語はわが国で「異言語混淆」と重訳されている。我が国の文化人類学界で最近しばしば用いられる「異文化混淆」という術語はおそらくここに由来している。英訳の hetero-glossia は苦肉の訳だと思うが、そこには「混淆」の意味はない。また разно-речие の第二要素は речь から派生したものだが、この語には「言語」という意味だけではなく、langue に対するパロール、ことばづかいなどの意味がある。オリヴィエによる仏訳 [Bakhtin 1978] は plu-linguisme と訳しているが、どの訳もぴったりとははまらない。私自身も困ったが、「小説の言葉」の私の訳においてはこれを結局基本的に「言語的多様性」と訳した。しかし場合によっては「言語的矛盾」「様々なことば」とも訳している [バフチン 1996] <sup>(4)</sup>。

「叙事詩に特徴的な階層秩序的距離を廃棄する」のが小説の言語であるとバフチンは説いた。システムとしての言語は絶えず限りなく分化し脱中心化してゆく。そこに生じる無限の多様性と差異の生産性に着目したバフチンは、ユートピア的に疎外が克服され人間性が全一性の中で回復される、などとは考えていなかった。バフチンにとっての接頭辞 co- はむしろ差異を生産的に衝突させる「同時性」を意味していたのである。そこには「我」に対する「汝」の根源的他者性が前提とされており、この意味での接頭辞 co- は接頭辞 разно- と相互補完的なものともいえよう。

## 6. 最後に——再び раз- と co-

ツヴェターエフとバフチンは3才違いの、いわば同世代の人間なのだが、かたや分ち難く一体となっていたはずの二者が引き裂かれてゆく悲劇を繰り返し歌い(「丘の歌」[1924]、「終りの歌」[1924])、かたや差異、疎隔、分化、距離、他者性といったものこそが生産的な対話的接触を可能にする前提である、という逆説的な思考を展開した。

両者の思考のベクトルは逆だが、そこには近代にあらわになり、現代でいよいよ先鋭化していった個と全体のアンチノミーが合せ鏡のように表現されている。しかもその両者が共にいわば接頭辞の詩学＝哲学ともいべきものによって思考を展開していったことは特徴的である。あるいはここにはツヴェターエフもバフチンも共に深くドイツ文学と哲学によって育まれていた、という事情が反映しているかもしれない<sup>(5)</sup>。しかしそれはすでに考察の別の主題となるだろう。

## 注

- (1) [ Цветаева 1988: 648 ] 参照。
- (2) キシュの邦訳は山崎佳代子訳、東京創元社により現在までに二冊の（『若き日の哀しみ』1995、『死者の百科辞典』1999）小説集が刊行されている。
- (3) このような見解とその批判については [ 桑野 1996 ] 参照。
- (4) **разно-речие** については [ Morson, Emerson 1990: 139-145; Todorov 1981: 88-93; トドロフ 2001: 104-110 ] を参照。
- (5) ギリシャ哲学に通じ、新カント派を中心とするドイツ哲学に深く影響されたバフチンの文体には、ギリシャ哲学研究から出発したハイデッガーの文体を思わせるものがある。

## 参考文献

- Бахтин, М., *Проблемы творчества Достоевского*. 5-е изд., доп. Киев. 1994.
- Бахтин, М., *Вопросы литературы и эстетики*, Москва. 1975.
- バフチン, М.『小説の言葉』伊東一郎訳 平凡社. 1996.
- Bakhtin, M., *The Dialogic Imagination: Four Essays by M. M. Bakhtin*. (tr. by C. Emerson and M. Holquist) Univ. of Texas Press. 1981.
- Bakhtin, M., *Esthétique et théorie du roman*. (trad. par D. Olivier). Paris. 1978.
- Булгаков, С., *Свет не вечерний*. Москва. 1997.
- ゴンザ(村山七郎編)『新スラヴ・日本語辞典(日本版)』ナウカ. 1985.
- Киш, Д., *Песне и преневу* (Приредило П. Чулић). Београд. 1992.
- Clark, K., & Holquist, M., *Mikhail BAKHTIN*. Harvard University Press, 1984.
- クラーク, К., ホルクイスト, М., 『ミハイール・バフチーンの世界』川端香男里・鈴木晶訳 せりか書房. 1990.
- 桑野隆「バフチンと全体主義—カーニヴァル・スターリニズム・ソボールノスチ—」『思想』1996年4月号
- Morson C, S. & Emerson, C., *Mikhail Bakhtin, Creation of Prosaics*. Stanford University Press. 1990.
- Todorov, Tz., *Mikhail Bakhtine. le principe dialogique*. Paris. 1981.
- トドロフ, Tz.『ミハイール・バフチン 対話の原理』大谷尚文訳 法政大学出版局. 2001.
- Unbegaun, B., *Le calque dans les langues slaves littéraires // Unbegaun, B., Selected Papers on Russian and Slavonic Philology*. Oxford. 1969.
- Цветаева, М., *Сочинения в двух томах*. т.1. Москва. 1988.
- Zwetaewa (Цветаева), М., *Gedichte . Prosa*. Leipzig. 1990.
- Черкасова, Л. Наблюдения над экспрессивной функцией морфемы в поэтическом языке (на материале поэзии М. Цветаевой). // *Развитие современного русского языка. 1972*. Москва. 1975.
- Черных, П. *Историко-этимологический словарь современного русского языка*. т. II Москва, 1993.
- Шанский Н. М. и др. *Краткий этимологический словарь русского языка*. Москва. 1971.

Etkind, (Эткинд), Е. (Ausgewählt und eingeleitet von), *Russische Lyrik. Gedichte aus drei Jahrhunderten*. München. 1981.

Якобсон, Р., Из языковедческих раздумий над общими особенностями поэзии славянских народов. // Jakobson, R., *Selected writings*, v. VI, part one. Mouton. 1985.

Jankélévitch, V., *La mauvaise conscience*. Paris. 1966.